

## 梵我一如とウパニシャッド

湯田豊

### はじめに

ウパニシャッドの根本特徴の一つとして、われわれはミクロコスモスとマクロコスモスの対比ないし等置を知っている。この思想は、結局、小宇宙の原理である真実の自己と大宇宙の原理であるブラフマンとが同一であるという結論へわれわれを導く。マクス・ミュラーおよびドイッセンはブラフマン（梵）とアートマン（我）が同一不二であるという確信を抱き、この思想をウパニシャッド哲学最大の特徴であるとみなした。このいわゆる梵我一如（*brahman-atma-ikyam*）の考えはそのまま現在まで踏襲され、だれ一人としてこれを疑う人はいない状態である。

しかし、いわゆる梵我一如が果してウパニシャッドの根本特徴であるか否かは、それが元来秘密の教えを意味したという考えと同じく、ウパニシャッド文献を検討した上でなければ断定することは許されない。梵我一如説が学界において通

用していることと、その説が正しいということとは直接には何の関係もないからである。

### I 梵我一如説の批判

まず最初に、ブラフマンが宇宙の原理でありアートマンが自己の原理であるという考えを検討しよう。プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド（1・4・10）において、「実に、ここには最初ブラフマンがあつた」と述べられている。この場合、ブラフマンが宇宙の原理であることは確実である。しかるに、同じウパニシャッドの同じ章のなかに、「アートマンだけが最初ここにあつた」（1・4・1）という文句が見出される。ここにおいては、アートマンはブラフマンと同じく宇宙の原理である。

ブラフマンが創造者であつたとすれば、アートマンもまた大宇宙の原理である——「……実に、アートマンは下である、アートマンは上である、アートマンは西である、アートマン

は東である、アートマンは南である、アートマンは北である。実に、アートマンはこの一切である」(チャンドーギヤ・ウパニシャッド、7・25・2)。しかし、このアートマンの教えに酷似しているのはムンダカ・ウパニシャッド(2・2・12)の文句である。ここにおいては、前後左右、上下に存在するもの、すなわち、この一切であるものはブラフマンである。

真実の真実 (*satyasya satyam*) を説くことで有名なプリハッド・アールニヤカ・ウパニシャッドのあの有名な箇所(2・1・20)においては、アートマンからすべての生氣(感覺器官)、すべての世界、すべての神々、すべての存在が生じると言われる。アートマンはウパニシャッドにおいて「大宇宙の原理」としてもまた認められている。

それでは、ブラフマンはウパニシャッドにおいては常に大宇宙の原理とみなされていたのであろうか。答えは「ノー」である。ガールギヤとアジャータシャトル王の対話は特に有名であるが、そのなかでガールギヤはブラフマンの性質について自己の見解を王に告げる。しかし、ガールギヤはブラフマンを大宇宙の原理とはみなしていない。なるほど、彼はブラフマンを月や電光あるいは虚空や風などのなかの人間として理解しているが、同時に彼はブラフマンを身体プルンヤのなかの人間として念じている(2・1・13)。これに対し、王はブラフマンを認識から成る人間 (*vijñanamaya purusa*) とみなし、そ

れが人間の心臓中の虚空に横たわると考えた(同上)。つまり、アジャータシャトル王がブラフマンを自己の原理あるいは小宇宙の原理とみなしていたことは明らかである。

ジャナカ王とヤージニャヴァルキヤとの対話において話題になつてゐるのはブラフマンである。しかしジャナカ王はブラフマンを人間の感覺器官や心あるいは息と同一視した(プリハッド・アールニヤカ、4・1・1以下)。ヤージニャヴァルキヤは、ジャナカ王に対し心臓が最高のブラフマンに他ならぬことを教える(4・1・7)。ブラフマンは真実なるもの、認識および無限者であり、人間の心臓のなかに置かれている(タイッティリーヤ・ウパニシャッド、2・1)。ブラフマンは、ことは、心、眼、耳および息の主体であり(ケーナ・ウパニシャッド、1・4・1・4-8)、それは四足から成る (*caturpad*) と言われる(チャンドーギヤ・ウパニシャッド、3・18・2)。四足とは、ことば、息、眼および耳を意味する。

ウパニシャッドにおいては、ブラフマンは微細なものよりも微細 (*anukhyani*) であり(ムンダカ・ウパニシャッド、2・2・2)、親指の大きさをもつていふと言われる(マイトラヤーナ・ウパニシャッド、6・38)こともある。ヤージニャヴァルキヤ自身は、ブラフマンを身体のない、不死の息として理解した(プリハッド・アールニヤカ、4・4・7)。古いウパニシャッド(同上、1・5・3)によれば、アートマンはことば、心お

よび息から成つてゐる。この表現はアートマンが小宇宙の原理であることを何よりも雄弁に物語つてゐる。しかるに、ブラフマンについても全く同じことが述べられてゐる。あるウパニシャッド(ムンダカ、2・2・2)によれば、ブラフマンは息であり、ことばであり、あるいは心である。

このように、ブラフマンが大宇宙の原理、アートマンが小宇宙の原理という図式は、ウパニシャッド文献について見る限り、全然あてはまらない。梵我一如の学説はその前提においてあやまりを犯してゐるからである。

## II 梵我一如の意味

私見によれば、大宇宙と小宇宙とを対比させ、それらを等置させることによつて両者を統一するという思维方法は決してウパニシャッド最大の特徴ではない。ここにおいては、種々の原理が雑然と並べられ、それらが最終的に同一である、とみなされるに過ぎない。ウパニシャッドに関する限り、大宇宙と小宇宙の等置の代わりに種々雑多な原理が、一つのものに融合されるのをわれわれは感じる。

ウパニシャッドにおいては、唯一の究極的実在が存在し、それが人間を含め全存在の根拠であると信じられていた。かかんに輝く光も人間のなかの光も同一不二であり、両者の間には如何なる対立も差別も存在しない(チャンドーギヤ・ウパ

ニシャッド、3・13・7参照)——これがウパニシャッドの根本思想である。ウパニシャッドの賢者は万物の内部に宿る存在をアートマンあるいはブラフマンと呼んだ。しかも、アートマンはバラモン、クシャトラ、世界、神々、存在、宇宙(*itani sarvam*)などと呼ばれる(プリハッド・アーラニヤカ、2・4・6)。

このように、種々のものが無差別にアートマンと同一視されたが、結局、ブラフマンだけがこのすべて(宇宙)を代表するものとして残り、同じ資格をもつアートマンと並置され、それと融合するようになった。これがいわゆる梵我一如の意味であろう。

チャンドーギヤ・ウパニシャッド(4・15・1)において、眼裡の靈魂(ブルシャ)がアートマンであるという思想が見出される。ここではアートマンは不死で恐れを知らないブラフマンである。しかし、ブラフマンが大宇宙の原理であるというニュアンスは何処にも感じられない。ここでは眼裡のアートマンはブラフマンと呼ばれてゐるだけである。

### 結びに代えて

アートマンとブラフマンをそれぞれ小宇宙と大宇宙の原理として対比・等置させ、最後に両者を神秘的な方法で同一視すること——これが現代において支配的なウパニシャッドの解

釈であろう。しかし、このような見解はウパニシャッドの精神に対して決して忠実であるとは言えない。ウパニシャッドの思维方法の特徴は、すべての原理を並置し同一視することである。そして、これらの同一視された原理は一つの実在へと吸収・併合されて解消し、独立の存在性を失つてしまうのである。それゆえ、ブラフマンとアートマンが同一視されるとしても、ここでは両者の統一ではなく融合が意味されている。梵我一如という語によつて意味されるのは、客観(ブラフマン)と主観(アートマン)の合致ではなく、自己自身と直接関連を有する主観だけが実在するという確信である。なぜなら、絶対主観の発見およびその体験がウパニシャッド最大の特徴であるから、この主観を人はアートマンと呼び、また、ブラフマンと名づけた。

いずれにせよ、ブラフマンといい、あるいはアートマンといい、それらは全宇宙に存在するただ一つであるものに対して与えられた呼称であり、それらは大小二つの宇宙の内部に宿る唯一なるものへの異なった名称に他ならない。そして、この唯一なる存在は宇宙と異なり、しかもそれを内部から統べている存在である。それがアートマンであり、あるいはブラフマンである。ブラフマンとアートマンの間には何の差別もない。両者は唯一の存在に対する異なった名前に過ぎないからである。

梵我一如とウパニシャッド(湯田)

## 執筆者紹介(二)

- |        |                |
|--------|----------------|
| 土橋 秀高  | (龍谷大学講師)       |
| 佐々木 章格 | (駒沢大学大学院)      |
| 久津谷 俊行 | (大谷大学大学院)      |
| 稲岡 了順  | (大正大学副手)       |
| 中村 薫   | (大谷大学大学院)      |
| 新野 光亮  | (駒沢大学卒)        |
| 林 智康   | (真宗本願寺派宗学院研究員) |
| 筑後 誠隆  | (龍谷大学大学院)      |
| 上田 靈城  | (寺院住職)         |
| 野本 覚成  | (大正大学大学院)      |
| 播磨 照浩  | (寺院住職)         |
| 亀山 正廣  | (本願寺派宗学院生)     |
| 根井 浄   | (大谷大学大学院)      |
| 菊村 紀彦  | (仏教思想研究所長)     |
| 井上 恵樹  | (大谷大学特別研究員)    |
| 源 淳子   | (龍谷大学大学院修士修了)  |
| 森 茂男   | (京都大学大学院)      |
| 山下 勲   | (大阪工業大学講師)     |

(二九一頁につづく)